

ボランティア海外実習の問題点と今後のあり方

Proposals for the volunteer training at developing countries

才田 春夫
SAIDA Haruo

はじめに

いくつかの大学では全国実務教育協会が認定する「国際ボランティア実務士」の称号を取得できるカリキュラムを整備している。富山国際大学でも、国際協力に携わる人材の育成を目的として、平成15年度から国際ボランティア養成講座を行っている。国際協力論、NPO・NGO論など関連科目を30単位取得すると、全国実務教育協会から「国際ボランティア実務士」という資格が認定される。今のところ、資格自体にはあまり重みはないが、それを旨とすることによって「実力をつけさせる」ことと、NPO・NGO活動、国際協力などにもっと関心をもってもらおうという狙いで行っている。

では、国際ボランティアに求められるものは何かということ、ボランティアをしたいという気持ちに加えて、自ら考えて行動する能力、つまり、その場に応じた仕事を自ら見つけ、それを成し遂げる能力で、トータルマネジメント能力を備えた人材であろうと考える。そこには国際性と様々な問題に柔軟に対応できる、多様性という要素も忘れてはならない。そのような能力を身に付け、青年海外協力隊やNGOなどで活躍できる人材輩出を目指している。これまでに多くの機関の協力を得て、実践教育としての過去2回の海外実習を振り返って問題点を整理して、今後の海外実習のあり方を考えることとした。

海外実習に対する考え方

国際ボランティア海外実習のあり方については、各大学によって考え方が異なっていると思われる。学生の自立を促すことを目的に、自分で実習先を見つけて積極的に行動することを期待している大学もあるであろう。学生の主体性を尊重して企画力、実行力を養いつつボランティアの3原則のうちの自主性、公共性を育てる意味ではそれもひとつの選択肢である。しかし、私は授業の主体者が、通常の科目と同様に、ある意図をもって遂行することが重要であると考えているので、以下の3点を重要視して実行している。

1) 実習先の国を好きになる(発展途上国理解の重要性)

実習先の国を好きになることが、国際協力の第一歩だと私は考えている。その国の文化を受け入れ、友人関係を築くことで、人々にとって真に必要な援助のあり方が見えてくる。一方的な押し売りの援助ではなく、協働を目指した援助関係を築くきっかけにもなるであろう。そう考えると、短期間の実習だからこそ相互理解に努力する必要がある。

2) 自信をつける

「自信をつける」には2つの意味が込められている。語学や自分の技術に自信を持つということもあるが、現地の人々と同じような生活をすることによって、現地に溶け込むことが出来るという自信、更に長期間のボランティアを続ける自信ということである。自信を持つことで生まれる「精神的な余裕」が、ボランティア活動をより有意義なものにするエネルギーとなる。従って、そのような目的を達成できる実習先を選定する必要がある。

3) 国際ボランティアの楽しみ(重要性)を理解する

国際ボランティアの楽しみを見つけることが、実際の国際ボランティア活動実現に結びつき、その活動を継続させる大きな要因となる。何を楽しみとするかは個人々で異なって良い。しかし、本人の意識に関わらず共通して言えることは、一時的なフィジカルサービスの提供で得られる精神的な充実感だけではなく、それを発端とした相互理解の積み重ねによって「人的ネットワーク」が形成されることであり、そのことが世界平和への貢献につながっているという、重要な意味が含まれている。従って、実習では、国際ボランティアに魅力を感じさせる工夫も必要であると考えている。

富山国際大学の海外実習内容紹介

以上のような狙いを持って、本学では平成15年度より、LLDCのひとつである「サモア」で海外実習を行っているので、その様子を紹介すると共に、過去2回の経験から生じた問題点について議論していくこととする。

表1. 実習スケジュール(2004年)

<p>サモアでの主な実習予定(アピア郊外の Tuanai 村にて)</p> <p>8月20日(金) サモア到着 歓迎カバセレモニー</p> <p>21日(土) Tuanai 村での実習*</p> <p>22日(日) 教会行事参加(サンデースクールなど)</p> <p>23日(月) Tuanai 村での実習*</p> <p>24日(火) Tuanai 村での実習*</p> <p>25日(水) Tuanai 村での実習* Japan day(村人に日本料理、文化紹介)</p> <p>26日(木) JICA 事務所表敬訪問、青年海外協力隊現場視察</p> <p>27日(金) サモア大学訪問(専門家、青年海外協力隊訪問、意見交換)</p> <p>28日(土) 現地青年との交流会</p> <p>29日(日) 教会行事参加+サンデースクール</p> <p>30日(月) Savaii 島調査</p> <p>31日(火) Savaii 島調査</p> <p>9月1日(水) 帰国(オークランドへ)</p> <p>2日(木) オークランド泊</p> <p>3日(金) 機内泊</p> <p>4日(土) 帰国</p>

平成15年度は8月25日から9月9日までの15日間、16年度は16日間に渡り、南太平洋にある人口約17万人のさんご礁に囲まれた小さな島国「サモア」で行い、それぞれ8名(男3人、女5人)と7名(男5人、女2人)が挑戦した。

サモアはきれいな海に囲まれ、人々は心豊かに暮らしているが、実は LLDC (Least among less countries: 後発開発途上国) のひとつで、多くの国から技術支援や資金援助を受け入れている国である。だからサモアには、主要先進国から多数のボランティアや技術専門家が派遣されている。日本からも青年海外協力隊員が 25 名 (そのうち 8 名が女性) とシニアボランティア 17 名、技術専門家 2 名が教育、医療、通信、農業、環境などの様々な分野で活躍している。従って、国際ボランティアとは何かを考え、体験する初心者コースとして最も適した国のひとつである。

学生は以下の 3 つの目的を持って実習に望んだ。1) サモアの伝統を重んじ、相互理解を深める。2) 青年海外協力隊の活動現場視察及び意見交換する。3) 現地の生活向上につながる調査研究を行う。

まず、学生たちの生活の様子を簡単に紹介しておく。現地では首都郊外の Tuanai 村の牧師さん一家のお世話になり、彼らと全く同様の生活をした。つまり、全員がサモアンファーレ (柱と屋根だけで壁のない家) に住み、温かいお風呂の代わりに野外で震えながら冷たい水シャワーを浴び、タロイモやバナナを主食とする生活である (図 1)。朝 6 時に起床し、庭掃除をした後、現地の若者と一緒に朝食を作ることから一日が始まる。食事後は手早く洗濯をすませ、手工芸などの伝統文化やサモア語を勉強する。



図 1 . サモア料理を楽しむ学生たち



図 2 . サモア大学にて日本語教師隊員の授業でのアシスタントを務める学生達

夜は若者たちとダンスや歌を相互に教えあい、夜中の 12 時ごろにようやく一日が終わる。温室育ちの学生にとってはちょっと厳しいかな? という心配をしていたが、皆、弱音を吐くどころか現地体験を丸ごと楽しんでた。英会話が苦手な最初は言葉が出なかった学生も、いつしかサモア青年らと楽しく談笑やスポーツなどして、溶け込んでいる姿に頼もしさを感じたりもした。

村での伝統文化勉強の合間を縫って青年海外協力隊等の活動現場訪問、水道局や南太平洋環境計画な

どの官庁や現場めぐりをして、ボランティア活動の意義を探ると共に環境の現状調査を行った。サモア大学では日本語教師隊員、音楽教師隊員の授業に参加し (図 2)、保健省では保健婦隊員の仕事を 2 日間に渡って手伝い (図 3)、国際ボランティアを実際に体験した。青年海外協力隊員のミニ体験を出来たことが学生にとって最も印象深かったようである。また、協力隊とは異なる場でのボ



図 4 . 折り紙を教えている学生たち

ランティア活動も取り入れている。その中でも学生に最も人気があったのは、16年度に行った、幼稚園教員養成学校での「折り紙教室」である。日本文化に興味を持っている校長先生から、折り紙は日本文化を学ぶだけでなく頭の体操にもなるので、是非幼児教育に取り上げたいということで依頼されたものである。参加学生にとっては、学ぶことの多い実習のなかで、自分たちが教える機会を与えてもらったことで、喜びも大きかったようである。また、教えることの難しさと楽しさを味わい、彼らにとっては少しばかり苦い経験にもなったようである。しかし、同時に、ボランティアには多様なあり方があることに気づく良い機会にもったことは間違いない。このように盛りだくさんな実習を行っているが、学生たちの感想は、「語学の重要性を痛感した」「隊員と現地職員が完全に打ち解けていることが羨ましく思った」「協力隊がより身近になった」「卒業後は絶対に協力隊を受けたい」など、共通する多くの点が見られた。各自が確実に「何か」をつかんでくれたようである。

実習経験からの問題提起

過去2回の海外実習実施経験から以下の問題点について考察する。

1) 海外実習をどこで行うか(海外団体などとの連携?)

各大学が独自のプログラムを計画する際に、どこでどのような実習を行うかが問題になるのではない。実習先の確保は、小さい大学や実習希望者が少ない大学ほど難しいのではないと思われる。特に、これから海外実習を始めようとする大学では、海外に受け入れ先がない場合がある。学生の受け入れ先を探し、現地とのプログラム実施計画の調整や引率教員の確保など大きな負担が生じる。そこで、各大学で実施しているプログラムの相互利用が出来るような体制づくりを提案したい。大学間の調整を、例えば実務士協会が窓口となって行っていただければ、実習先を持っていない大学が利用することも比較的やりやすいのではないだろうか。各大学ではそれぞれのコンセプトに基づいて実施しているので、海外実習参加を希望する学生は、自分の目的にそって選ぶことが出来、学生の選択肢を広がるというメリットも生まれる。また、共同実習を行うことによって、各大学が1名の引率教員を出すだけで、プログラムとしては複数教員を確保することが可能になる。これにより、大学や教員への負担軽減が図られるだけでなく、各大学、教員、学生を含めた相互コミュニケーションの場が得られ、より良いプログラム改善に繋げていくことも可能になるなど、多くのメリットが得られるはずである。

2) 安全確保(危機管理)

2004年度に参加した学生の一人が、行きの経由地でパスポート、お金など一切の貴重品を紛失する事故が発生した。このため、当該学生と共に引率教員がその地に止まり、パスポートなどの再発行手続きを行った。同時に、日本の留守宅や旅行会社及び大学への連絡調整に尽力したが、留守家族にとっては状況を正確に把握できずに、歯がゆい思いをされたようだ。従って、留守家族とのきめ細かい連絡の必要性を痛感した次第である。また、実習最終日に別の学生が許可を得ずに抜け出したために、住民の助けを借りて探しだした、という逸話もあった。

2例とも大事には至らなかったが、不測の事態に備えて対策を練っておくことが肝要である。

従って、実務士協会等で事故例（問題例）を集積して、それをもとに教員研究会の場なりでケーススタディを行っていくよう、提案したい。

3) 海外実習の時期

実務士協会が定めているカリキュラムガイドラインのうち、実習時期に猶予を持たず必要があると考えている。ここでいう時期とは、受講可能学年のことである。現在、1年目に必修科目の単位を取得することが、実習受講の条件になっている。この規定では1年生は実習に参加できないことになる。しかし、実習効果は若い学年ほど効果が期待できる。海外経験を機に、勉学意欲増大することが、これまでの経験から明言できるからである。従って、1年生でも実習に参加できるよう、カリキュラムの検討をすべきである。

4) 実習が学生に及ぼす影響（帰国後の変化）

問題点ばかりでなく、実習の利点についても簡単に触れておきたい。実習に参加した学生は皆、自分は変わった、と意識するようになった。例えば、目標を持って勉学に取り組むようになった。気取らずにボランティアが出来るようになった。海外への夢が広がった。ひとと話をすることが楽しくなったなど、人間的に成長したことが伺える。

以上のことから、国際協力を理解するだけではなく、情操教育の面からも、海外での現場体験が非常に重要だということを再認識した次第である。これからも、国際協力にかかわる人材育成を目指して、プログラムに改良を加えながら、海外実習を続けて行きたいと考えている。

謝辞

国際ボランティア海外実習及び調査に際し、ご協力とご支援を頂いた JICA サモア事務所関係者、青年海外協力隊、シニアボランティア、Tuanai 村の方々に深く謝意を表します。

参考文献

国際協力事業団（資料） 気球の明日をみつめて 1998年

才田春夫 国際協調時代における大学の役割 富山国際大学地域学部紀要 Vol.4, p77-78.

全国大学実務教育協会 会則・称号認定関係規定集（平成16年7月1日）

山本 泰、山本真鳥 儀礼としての経済 サモア社会の贈与・権力・セクシュアリティ 弘文堂